

環境共生学とは何か

—2020年度神戸大学国際人間科学環境共生学科新入生「初年次セミナー」・緒言—
(新型コロナ・パンデミック下での遠隔授業、2020年5月22日)

浅野慎一(環境共生学科長)

環境共生学とは何か。それは一言でいえば、国境を越えて展開する地球的問題群(グローバル・イシュー)を正しく認識し、人類を持続可能にするための筋道を明らかにする新しい学問です。そしていうまでもなく現下の新型コロナ・パンデミックは、そうしたグローバル・イシューの一つです。つまり今・この状況のもとで私達が何を認識し、どう生きるのか。それこそが生きた環境共生学ともいえます。環境共生学は、既に確立された学問体系を、教員が学生に一方的に教えるものではありません。今、ここで問われている問題に向き合う中で生み出される、生きた学問です。大学の教室の中だけでなく、世界全体で起きている現実から学び対処する、その積み重ねが環境共生学を創ります。

その際、大切なことが3つあります。

第1に、パンデミック終息後の世界は、それ以前、つまり2019年までとは違うということです。私達は、かつての日常には二度と戻れません。人間と自然との関係も、グローバルな世界の格差や権力関係も、人々のライフスタイルや技術も、去年まで私達が想像もしていなかったことが、新たな「常識」になるでしょう。そこには、すばらしい変化があれば、恐るべき変化もあります。その意味でパンデミックは、単なる感染症の一時的流行ではありません。私達は今、グローバルな人類社会の歴史的転換点を生きているのであり、だからこそ歴史的・長期的な視野、歴史観を身につけなければなりません。

さて第2に、グローバル・イシューはパンデミックだけではありません。自然環境破壊、地球規模の格差や貧困、平和や民主主義の危機、新たなテクノロジーによる人間の支配など、数々の問題が複雑に絡み合い、展開しています。パンデミックは、一つの構成要素にすぎません。だから私達は、自然科学や社会科学の一つの分野だけでなく、学際的にものごとを捉え、国境だけでなく学問の境界線も軽々と越える能力を鍛え上げていく必要があります。

そして第3に、「不要不急」の反対、つまり「絶対に後回しにしてはならない、今・ここでなすべき本当に大切なこと」が何か、それを真剣に考えることです。それが何かは、人によって違うでしょう。しかし同時に、自分の人生にとって、また世界や人類の未来にとって、本当に必要なこと、後回しにしてはならないことは何か。それをきちんと考えなければ、私達の人生は、目の前の不要不急のことで埋め尽くされていってしまうでしょう。私達は主体的に問題意識をもち、あらゆることに疑問をもち、目の前の表面的な事柄に流されない深い哲学を身につける必要があります。

皆さんが今後4年間、神戸大学環境共生学科で大きく成長されることを期待します。教員も、ともに成長したいと思います。以上で、私の話を終わります。